



第51回自然観察ハイキング「見沼の自然と史跡を訪ねて」

第51回目の自然観察ハイキングは、10月6日（土）9時30分見沼自然公園集合により開催された。前日までの天気予報が曇のち雨との影響か参加者は28名であった。幸いなことに好天のもと4班編成での自然観察となる。コースは見沼自然公園（井沢弥惣兵衛為永の銅像・修景池・樹林地・自然観察園）～見沼代用水東縁（以下代用水とする）右岸～五斗蒔橋～鷺神社～総持院～緑のトラスト1号地～国昌寺～国昌寺橋～代用水右岸～上野田橋～深井家長屋門～さぎ山記念公園斜面林～諏訪橋～見沼自然公園までのさいたま市内約6kmの行程である。

見沼自然公園は浦和市制60年を記念して1994年（平成6年）に造成された11.6haの都市公園である。まず今から約280年前に見沼代用水を半年間の工事で完成させて、見沼に約1200町歩の水田開発を成功させた井沢弥惣兵衛為永の銅像への表敬をする。スイレンの咲く修景池に移るが、カルガモの群れの傍に、冬鳥である数羽のオナガガモも泳いでいた。今は稔りの秋であり公園内でアキニレ・アラカシ・エノキ・ガマズミ・スダジイ・シラカシ・マユミ・ヤマハギなど果実が見られた。スダジイの実を拾ったりする。

また草本は、事前調査（10月3日）で花・結実中の種はアカネ・カゼクサ・ミゾソバなど80種に達している。ヒガンバナの花がよく咲いている。特に代用水右岸の土手では花が連続して見ることのできる所も多い。ツルボの花も見られた。公園の南側の水田は稲刈りも終わり切り株から蘆（ひつじ）が再生し緑に覆われている。代用水に架かる五斗蒔橋を渡り左岸を南に向かい鎮守の森に囲まれた鷺神社を目指す。この神社は南部領辻の鎮守であり、氏子たちによって「辻の獅子舞（龍頭の舞）」（市指定無形文化財）が受け継がれている。神社の鳥居は両部鳥居で笠木は瓦葺きと立派のものである。

苗木畑を進むと総持院に着く。この寺院は、安土桃山時代の開山と伝えられる真言宗智山派の寺院で鐘楼造りの堂々とした山門がある。またボタンの名所で知られる。山門の上空には2羽のオオタカが上昇気流に乗り優雅に旋回していた。次は国昌寺であり、ここは天正年間（1573～92）開山と古くからの曹洞宗の寺院で、見沼田圃を見下ろす台地にある。山門は「開かずの門」（市指定有形文化財）として有名である（みぬま通信第43号の関連記事を参照）。庭のセンダンバナボダイジュ（市指定天然記念物）は全て落葉していた。



国昌寺橋を渡り、代用水を挟んで緑のトラスト1号地を西側に見て進む。代用水もこの周辺は自然護岸でありカルガモが泳ぎ、水中には魚影が認められる。近くの草地にはアキノウナギツカミ・ママコノシリヌグイの花が咲いている。上野田橋を渡り左岸に戻り市指定有形文化財の深井家長屋門に向かう。門の前のタラヨウが話題になる。柿渋採取用だったカキノキなどのある畑道を歩きさぎ山記念公園斜面林を経て、諏訪橋を渡り見沼自然公園に戻ってくる。時刻は12時50分頃と予定より遅れての到着であるが、「ゆっくり観察できて面白かった」との感想を聞きホッとする。（若野忠男記）

見沼たんぼくらぶ関係のイベント

見沼ふれあい農園づくり 1号地

ー里芋・八ツ頭・生姜の収穫祭ー

見沼ふれあい農園づくり1号地の2012年度収穫祭は、11月15日(土)9時さいたま市緑区見沼610・613の畑において県担当者・作業に参加の会員及びさいたま市内の5つの社会福祉団体の総勢43名の参加を得て開催された。

当日は晴天に恵まれ参加者全員で農園に立派に生育した作物である里芋・八ツ頭・生姜の収穫に取り組んだ。夏季栽培は初めての事業であったが、天候に恵まれたことや、猛暑のなか汗をビッシヨリ掻きながら予想以上に繁茂した雑草の除去・追肥・畝の土寄せなどの作業によって収穫は良い成績(数量の計測して無いが)を収めたと言えよう。

ただ、台風の影響で八ツ頭の茎が倒れて「ズイキ」の収穫にはやや期待外れであった。社会福祉団体を招き収穫の喜びを共有しようとしたのは、里芋・八ツ頭の収穫が相当量に達する予想が立った段階で、その成果を少しでも地域社会に貢献できればとの配慮からである。

この収穫祭に至るまでの作業は、当初の計画では種芋の植え付けから、作物の生長がほぼ終わる8月17日までに5回に亘る除草などの作業日を予定していたが、実際には夏季の雑草の生長が極めて旺盛であったこと(大雑把な調査ではスベリヒユ・タカサブロウ・メヒシバなど75種)、猛暑のため長時間作業が困難であったこと(暑さを避けるため8時30分からの作業日も)、募集対象を会員限定したこともあり実態に合致せず参加人数が少なかったこと等への対応から、10月28日の最後の除草及び試収穫までに臨時作業日を含めて10回に達している。

植え付けから収穫祭までの11回の作業日に7回以上の参加者は6名、そのうち皆勤は1名であった。第1回からの参加者は20名・延べ112名が作業に従事した。初めての経験での喜ばしい収穫祭を迎えることができたが、夏季栽培に対する今後の課題も種々残している。

(若野 忠男記)

秋野菜づくり 2号地

10月発行の「みぬま通信」において、第一回目の種まきについて報告をさせていただいた。種まきには役員以外の参加者が73名という盛況であったが、第二回目の9月29日が35名と激減してしまった。先行きが心配されたが、今年は例年になく残暑が長く続いたせいであったと思われる。

第三回目と第四回目が54名、収穫祭となった11月17日が72名であった。

子供たちの参加も順調で9月の作業だけは、13名と少なかったが収穫祭には26名もの参加があり、大人の間に入って奮闘をしている姿がなんとも頼もしかった。

土地水政策課の佐藤さんも田嶋さんも参加者と一緒になって収穫を楽しんでいただいた。お二人とも行政側の人であるので、なにかと参加者からの質問や要望も多かったのではないかと思われる。

今年から初めて参加をされた人も多く、作業のやり方をうまく理解できず自分勝手なことをする人も見受けられたが、役員や常連さんが丁寧にアドバイスをしていた。

若いお父さんやお母さん達もこうした体験をしっかりと子供たちに伝えていただくことでこの作業は意味があると考えます。

収穫祭が終わって1週間後に個人的に畑に出かけてみた。

ブロッコリー、キャベツ、春菊、総太青首大根などはほとんど残すことなく持ち帰ってもらっていた。その反面小松菜やコカブなどはかなり残っていた。

どうやら日常の食生活が和食型から洋食型に変わってきているようで、特に若い世代の人達にはそうした傾向が強いのではないかと考える。

来年は家族で参加される方々を増やし、収穫した野菜は残らず持って帰っていただくようにしたいものである。

(佐々木明男記)

見沼たんぼ地域の会員関係イベント

第四回見沼たんぼウォーキング

今までは見沼たんぼの北側や南側にコースを設定したので、今回は西側を使ったコースで行った。

このあたりは、田圃風景と新都心の眺めのよさを特徴として紹介をされているところで、近代化が進む新都心と頭上を走る高速道それを取り巻いて緑の空間が広がっている場所である。

この日の新都心駅は他にも催しがあり、早朝から大勢の人達が集まりなかなかの賑やかさであった。集合の30分前から参加者も続々と集まってきて、用意してきた資料の50部がすぐになくなってしまった。90名以上もの参加者があるとは考えていなかったのである。

埼玉県からは土地水政策課の上木課長と田嶋主査が参加をしてくれた。上木課長には出発式でのご挨拶をいただき、田嶋主査には参加者と一緒に全コースを歩いていただいた。

先頭集団からの列は途切れることもなく、最後尾までしっかりと列が出来ている。それぞれの服装や歩き方を拝見するかぎりでは、日常的に歩いている人が多いように見受けられる。

ゴールとなる合併記念見沼公園には、予想以上に早く到着する人が多く、5キロ少々コースは物足りなかったかもしれない。

しかし多くの参加者はゴールから継続をして大宮駅まで歩かれたようであるので距離的には満足していただけたと思う。

今やウォーキングは生活密着型のスポーツとして定着している。私がウォーキングを奨励し始めたのは20年も前である。当時としては今日の大流行は想像出来なかった。何事も繁栄を続けると本来のあるべき姿を見失いがちになる。

ウォーキングは手段ではなくそれ自体が目的なはずである。利用されているだけで夢中になっているような人も多々見受けられるが、自分のためのウォーキングを見失うことなく、いつまでも長く楽しんでいただきたいと願うものである。

(佐々木 明男記)

第3回清掃ボランティア

11月11日(日曜日)に曇り空の下、見沼グリーンセンター周辺でクリーン活動が実施されました。参加者はさいたま市内はじめ深谷市等の市外からの参加もあり男性32名女性16名の

総勢48名でした。

当日は午前9時30分から見沼グリーンセン



ター正門前で受付が始まり、参加者一人一人に軍手・火ばさみ・ゴミ袋・清掃コース図・吊り下げ札が渡され、午前10時より挨拶、作業説明の後清掃活動に入りました。

清掃活動は風車のある見晴公園と見沼たんぼ芝川沿いの神明下橋から石橋までの約1キロの間を左右両岸に分かれて空き缶やペットボトルなどの回収を1時間半程行いました。

清掃活動が終わった後、参加者の皆さんは晴れやかな顔でもどり、記念品の見沼ファーム21が見沼たんぼで生産したお米とお茶を受け取り帰路に着きました。

参加者の声を聴きますと「清掃活動に参加してうっすらと心地よい汗をかき良い気分転換になりました」「私のコースは思ったよりゴミは少なく、芝川沿いを散歩気分で大変気持ち良く歩くことができました」「来年は友達を誘って参加します」などそれぞれの方が清掃ボランティアで気持ちの充実した半日を過ごしたようです。

今後も当くらぶでは見沼たんぼの魅力を発信するとともに見沼たんぼの自然環境や景観の保全に向けた事業を展開してまいりますので多くの方の参加をお待ちしております。

(三上 雅央記)

見沼たんぼ水彩スケッチ紀行

桐の花咲く 総持院」

(さいたま市緑区 南部領辻)

見沼代用水東縁の東台地に建つ真言宗智山派寺院。訪れた5月はうす紫色の桐の花が満開、甘い香りがほのかに漂う。別名ボタン寺としても知られ、境内には約650株のボタンが植えられており、4-5月には多くの愛好者で賑わう。本堂は明治時代に大火にあい全焼したが再建され、鐘楼は消失をまぬかれたが梵鐘は昭和52年再鑄されたものの。



絵と解説 八木一郎



「西福寺」(さいたま市見沼区 大谷)

見沼たんぼの加田屋新田に接する台地上に位置する曹洞宗の古寺。寺の北側にはかつて見沼の船着き場があったという。

明治の初期には大谷学校が開かれ、学校教育が行われていた。寺の北東、見沼たんぼに接する場所に「大谷ホタルの里」があり、6月頃ゲンジボタルが見られる。



「紅葉」(浦和くらしの博物館 民家園)

白い建物は旧浦和市農業協同組合三室支所の倉庫。

白色の蔵と紅葉との組み合わせは得難いモチーフながら、秋の日は「釣瓶落とし」のように暮れやすく、紅葉と白壁の組み合わせの美しい瞬間をとらえるのに苦心した次第。

見沼たんぼくらぶ会員作品展

坂東家の勝手口

作者 塩川 仁子

「見沼スケッチ会」がお世話になっている旧坂東家住宅、夏の暑い日に日陰を求めて北側へ。

見慣れた正面も良いが、裏側もまた昔の面影が偲ばれて懐かしい感じ。猛暑といわれた夏もいつしか終わり、朝晩は寒ささえ感じるようになってしまった。

もうすぐイチョウも真黄色に、楓も真っ赤になる。



見沼たんぼ探訪記

「フナノ」の復活活動

「フナノ」は、埼玉県南東部地域で、稲ワラの貯蔵・保管のために作成されていた「ワラ塚」の一種です。



「フナノ」の復活の経緯ですが、2007年、近代美術館が「田園賛歌」と

いう展覧会を開催した際、北浦和公園にワラ塚を作成するにあたり、見沼ファーム 21 がお手伝いをしました。その時は埼玉の地で開催なのに「埼玉のワラ塚」がないのが残念でなりません。このため、「見沼たんぼでは、どんなワラ塚が作られていたのだろう。」ということになり、見沼ファーム 21 の島田理事長さんたちが、地域の農家に訪ねたりしました。

2008年、50年ぶりに「フナノ」復活

その中で地域の農家さんから、「フナノ」という言葉を聞き出しました。また、ある農家さんが、50年前におじいさんから教えられて作った事があるという事も聞き出しました。最終的にはその農家の方々に指導頂きまして、2008年秋、50年ぶりに「フナノ」が復元され、今年も、四回目の「フナノ」が作成されました。

見沼の農業文化遺産として「フナノ」

フナノのワラは、約5反ほどの水田の稲ワラを使って作成されていたとのことです。「フナノ」に貯蔵された稲ワラは、主に、約1/3は「燃料」として、1/3は農耕牛の「飼料」として、1/3はムシロやワラ縄などのワラ細工の材料として、年間を通して使用されていたとのことです。稲の副産物のワラを貯蔵・保管し、年間を通して様々な用途に利用する「フナノ」は、見沼地域の「稲作文化」を構成する重要な要素です。この「フナノ」が、地域の歴史的な農業文化の象徴として末永く復活・再生されることが期待されています。

(北原 典夫記)

何時まで見れるか案山子の姿

お彼岸前であったが、総持院から加田屋地区の平成のさくら記念碑の辺りまでを、見沼代用水東縁に沿ってゆっくりと歩く事にした。国交省では利根川水系の貯水量が激減したために、水の供給量を10%削減し始めたとテレビや新聞で報道している。ここを流れる見沼代用水の水の流れも、通常よりも少ない量になっているのであろう。

今日も焼けつくように残暑が厳しいが、樹木の陰に入ると柔らかな風に



触れる事が出来るので涼しい。

たんぼに目を向けると黄金色に実った稲穂が重そうに頭を垂れ、風の吹く度に右に左にと揺れている。こうした黄金のたんぼの風景こそ、正に実りの秋を象徴している。その昔、八代将軍吉宗公の時には幕府財政の救済策として開拓された田圃だったので、見沼たんぼの全域に、このような黄金の田圃が見られたのであろう。

今では時代が進んでしまい、世の中が西欧化し食事にまでこの傾向が見られ、「米の食事」から「パンの食事」へと変わってしまったのである。



従って、米の生産が調整され耕作面積が減少し、6%前後にまで落ちてしまっている。

昔、当たり前に見られた案山子が、いつの時代にまでこの見沼たんぼで見られるのか全く寂しい話である。

(沼田 紀雄記)

見沼たんぼの仲間たちNo.24

南部領辻ボランティア水田友の会

農業体験の実施を主宰

「南部領辻ボランティア水田友の会」はさいたま市緑区にあり、多くの皆様と一緒にあって農業体験の実施を主宰し、見沼たんぼの保全、活用、創造に努めている。厚澤正栄様が代表を務めており、およそ2反（約2000㎡）の県の公有地を活用し、多くの参加者とともに水稲を耕作している団体である。

見沼たんぼ公有地活用推進事業計画の一環とする活動で、始めてか



ら約14年にもなり、農業体験の希望者は県で募集、今年度は122名の方々が参加されたという。「米作りを通して大地の恵みを実感しよう」との言葉を掲げ、手作業での田植え、田の草取り、刈り入れ、無農薬栽培、天日干し・・・等を固守して作業を進めている。

手作業による年6回の体験作業

体験作業は年間4回で6月の田植え、7月の田の草取り、9月のあぜ草刈り、10月の稲刈りの作業である。この他に11月には収穫祭を行い、収穫したばかりの新米を、里芋を主材料にした芋煮と一緒に食し、五穀豊穡を互いに祝い合う。毎年、子供たちが大勢参加しているが、こうした体験農業を行う事によって、農業の尊さを体を動かしながら自然のうちに学んで行くそうである。

今時の子供は、家の中でテレビゲーム等に熱中する事が多い。また、屋外で遊び「土や泥」で衣服を汚して家に帰る事にでもなると、親に叱られる事もあって、外で遊ぶ事が少なくなっている。こうした中で、親子揃っての「田植えや田の草取り」等は、膝まで水の中に浸かり、身体中をドロコだらけにしながらか水や泥との触れ合いが出来、自然の中

に存分に溶け込む事が出来る。

農作業を通して学ぶ

ここでの体験農業は、全ての作業を昔の作業と同様「手作業」で行う事にし、各人が協力し合いながら、「協同作業の重要性」を農作業を通して学んで貰うのが狙いという。初めて参加する人たちには、本会の役員や以前に参加した人たちが各作業を教えてくれるので、教えられたり教えたりの姿が毎回見られる。こうした姿は協同作業の中でないとみられない動きであり、実に美しい姿である。

米の収穫量は年によってバラツクが、平均850kg程度となり、まず第一に地元の社会福祉事業団体に寄贈し、残りの分を参加者で分け、互いに祝い合うという。厚澤様は、皆さんがこうした農作業を通して楽しんでくれるのが何よりも嬉しく、体の動く限りこの活動を続けて行きたいと話してくれた。

人一倍の情熱

お忙しい中、貴重なお時間をお借りして取材をさせていただきました。話をお聞きしている間の

厚澤様は、物事に対する取り組み方に人一倍の情熱が感じられる。



ボランティアに徹し切った態度、幅の広い高度な見識、温厚な心配り・・・が節々に感じられ、その人となりは目の覚めるほどであった。厚澤様は本会の他に、「見沼たんぼくらぶ」の副会長をはじめ数々の要職を務めておられますが、こうした人となりの証であると思いました。（取材：召田 紀雄）

南部領辻ボランティア水田友の会

代表 厚澤 正栄

（さいたま市緑区南部領辻2853-1）

見沼たんぼの農家さんのお話

「みどり直売所」 厚沢純子さん

かつての見沼田んぼらしい景観を今も残すトラスト1号地がひろがる人気スポット、総持院前で厚沢純子さんが「みどり直売所」を始めてから4年が過ぎました。最初はテントでスタート。雨が降ると大変で、ブルーシートでしのいだりもしたそうです。

今は立派な直売所・・・と思いきや、なんと大型のウイング車！ 土地の規制で建物を建てることができず、駐車場ということでの



(厚沢さん(右側)と妹の岩崎さん)

苦肉の策だそうですが、そのアイデアはさすがです。

土地の段差を利用している

ので、そう云われなければ気がつきません。その手前には、温もりを感じてつい座りたくなってしまおうような大きな木製の椅子とテーブル。

買い物だけでなくいろいろと話をしていく人が多いので、ゆっくりしてもらうために置いたのだそうです。近辺はもちろんですが、川口や蕨から毎週買いにきてくれるリピーターさんも多いということで、この日も寒い日でしたが、お話ししているとホカホカした気分になってくるのは、お人柄のせいでしょうか・・・。

冬はとにかく寒いので、薪ストーブを炊いて、ついでに焼き芋も作って試食してもらったりと、季節によっての心配りも忘れません。この日は妹さんと二人でお店番でした。

適地適作といって、野菜もその土地に合うものと合わないものがあるので、厚沢さんを含めて7人の仲間が、4地域から自分の生産物や加工品を持ち寄っています。厚沢さんはもともと地元の植木農家で野菜は自家用だけ

栽培していましたが、ここを始めるので生産を増やしたそうです。

漬物と味噌は加工の資格を持っている人がいるので、その人に提供してもらって販売していますが、例えば大きな冬瓜を売り場で半分に切るのも加工、ということになり、許可が必要なのだそうです。だからカボチャも冬瓜も大きくても丸ごとしか売ることができません。ふるさとの味伝承士でもある厚沢さん。できれば食事の提供もしたかったのですが、上下水道の設備や保健所からの認可等々、クリアしなければならない問題が多く、諦めたそうです。このロケーションで地元素材のランチが楽しめたら、見沼散策の魅力倍増になるのに！！

これからやってみたいことをお尋ねすると、それまでの明るさがちょっと翳って、「う～ん、いつまで現状維持ができるかだね」と。メンバーはみんな歳をとってくるしまわりに引き継いでくれる若い人はもちろん、50歳代の人もないとのことでした。皆さんが着けているグリーンのエプロンの胸には「みぬま夢らくど」の白い文字。楽土のようなこの直売所も、今、農業が抱えている問題を共有しているのだと痛感しました。

真冬は道の真っ直ぐ向こうに、くっきりと富士山が見えるそうです。そんな時にまた、日溜まりのようなここを、お訪ねしてみたいと思いました。



(ウイング車を利用したみどり直売所：総持院前で毎週土・日(9:00~15:00)だけの営業ですが、年末年始も土・日ならやっています！)

(取材：高橋 いずみ)

見沼たんぼくらのイベント案内

第52回自然観察ハイキング

見沼の自然と史跡を訪ねて

ー春の七草とシダレザクラ

日時：3月23日（土）9時～12時

集合地：JRさいたま新都心駅改札口向側

解散地：中山神社（大宮駅東口行きバス停あり）

■自然観察指導員のガイドで、史跡を巡りながら春の花を楽しみます。 道程：約6km

コース：さいたま新都心駅⇒大宮南部浄化センター（自然庭園&みぬま見聞館）⇒上山口新田（春の七草）⇒圓蔵院（シダレザクラ）⇒中山神社

申込み：当日、集合地で受付8時30分～9時

会員の主宰するイベント情報

第222回見沼ぶらり・おもしろ自然観察

日時：1月20日（日）9時～12時

集合地及び解散地：大宮第二公園南管理棟

主催：NPO法人自然観察さいたまフレンド

■自然観察指導員のガイドでテーマ別班行動

① カモ類など野鳥ウォッチ

② 冬の雑木林

③ 野草の越冬スタイル

申込み：当日、集合地で受付、8時30分～9時

参加費：¥500

交通：大宮駅東口からバス⑧宮下行き8：15発「芝川」下車、北側

見沼たんぼクリーンウォーク

日時：3月9日（土）9時30分～12時

集合地及び解散地：さいたま市立大宮体育館正門

主催：NPO法人自然観察さいたまフレンド

さいたま市みどり愛護会

■見沼たんぼを貫流する芝川・石橋～境橋周辺を散策しながらゴミを収拾します。

申込み：当日、集合地で受付9時～9時30分

参加費：無料

交通：東武野田線大和田駅から徒歩15分

「見沼スケッチ会」第6回水彩画展

日時：3月5日（火）～10日（日）9時30分～17時（ただし、5日は12時から、10日は15時まで）

会場：氷川の杜 文化館

■当会は見沼たんぼを愛するスケッチ同好会で、毎月第1火曜日、初心者も経験者も皆で見沼の風景をモチーフに水彩画を勉強しています。

交通：大宮駅東口から徒歩15分、氷川参道東側
問合せ：TEL（048）822-5504・八木

お知らせ

会員の作品を募集してます！

会員の皆様の作品を当会誌に掲載しています。絵画や写真、短歌や俳句や詩、クラフトなど皆様からの応募をお待ちしています。

見沼たんぼに関わる作品を優先的に紹介させていただきますが、それ以外の作品でも紹介いたします。会員の多くの皆様からの応募を楽しみにしております。作品は「見沼たんぼくらぶ」宛にお送り下さい。

「見沼たんぼくらぶ」へのお誘い

「見沼たんぼくらぶ」をお友達に紹介して下さい！
「見沼たんぼ」を愛する仲間を増やしましょう！
個人・団体・法人とも1口¥1000円です。

みぬま通信第53号

発行日 平成25年月1月1日

発行所 見沼たんぼくらぶ

〒337-0053 さいたま市見沼区大和田町

1-2124-3 小野方

TEL・FAX (048) 683-1764

E-mail t.ono@axel.ocn.ne.jp

URL <http://minumatanbo.web.fc2.com/>

© 2012 Minuma Tuusin